



お茶の水女子大学 教育・研究成果コレクション

TeaPot

Ochanomizu University Web Library - Institutional Repository



お茶の水女子大学
Ochanomizu University

Title	農村青年の共同学習
Author(s)	吉田, 昇
Citation	教育社会学研究, 8: 47-53
URL	http://hdl.handle.net/10083/31345
Rights	

農村青年の共同学習

吉 田 昇

農村の青年たちは、むかしから仲間をつくっていた。昼間はひとりひとりにわかれて田や畑で作業を続け、夜は家長の支配する息ぐるしい圧迫感をもつ家が待っている。そういう生活のなかで、青年たちが気がねなしで話し合える仲間を求めていたのは当然である。

若者組は、このインフォーマルな集団が多少組織化されたものであった。御茶目という公式の規約はつくられたが、冬季に田のなかにワラでつくった小屋をかけ、夜になると集まって歌をうたったり、娘のうわさをしたりする若者たちには、体をすりよせて感覚的に安定感を求める本能的な姿勢がみられたのである。

この集団は永井道雄氏が無形の組織として定義する次のような性格をもっていた。

「無形の組織のなかでは、組織の規範は顕在するよりも、むしろ潜在し、人間関係を情緒的に、またパーソナルに処理し、さらにそのような関係のなかに、つねに親密さをたもつことが尊重さ

れる。そして、その成員の数は通常少数であって、彼等は、特定の共同目的にむけられた、連帯活動よりは、むしろ文化的背景の共通性によってむすびつき、おたがいに特殊な職務をとおして接触するよりも、人間どうしとしてつきあうことを楽しんでい

る。(1)

この無形の組織は、精神衛生的な意味はもっているが、そのままでは、社会をよりよくする建設的な役割をはたすことはできない。これまでのしきたりに従い、なれ合い的な気分のもとで封建的な身分関係を強化する弊害をもっている。

明治維新の後に、新しい教育をうけ、知識が人間を向上させ、社会を前進させる力だということを知った青年たちが、若者組のあり方に満足できないで、もっと組織的な学習集団をつくらうとしたことは、自然のなり行きであった。明治十年代から若者組を夜学会として再編成しようとする動きが各地にみられるのは、その現れといつてよい。明治二十年代に、若者組が青年会と名称を

改めるようになったのも、無目的な集団から、修養・向上という目的をもった集団に改造しようとする山本灌之助の場合のような自主的な青年運動が背景になっている。

だが、若者組から学習集団への転換が地についたものとして確立する前に、行政的な社会教育がこの改変に力をそぐことになった。明治の三十年代になると、青年会が学習の場としても、行政の補助的な実践集団としても、価値があることがみとめられ、「旧来の慣例に依る若連中等の青年団体に対し適宜指導を加うるに於ては容易に通俗教育上著大の効果を収め得べき儀と存候」

という通牒が文部省から発せられた。

インフォーマルな青年の集団は、親睦という一項を目的のなかに含む青年団にひきつがれ、そのなかで意図的組織的な面が強まっていた。青年団の会合では、役場の事業の手伝いをどうするか話し合わせ、奉仕への義務と、修養の責任が強調されるようになり、会合の通知も「発第何号」という信号をいれ「何々ニ関スル件」といった役場の公文書的な体裁がとられるようになった。

このような状況では、パーソナルな関係は背後に退ざいてしまふ。青年たちは、肩を張った気持で会合に出席しているのです。昔の若者組のような気楽な話し合いは、公的な場では出来なくなってくる。

しかし、農村の青年たちのインフォーマルな集団をつくらうとする要求はなくなってしまったのではない。それが青年団の集会で満されないとすると、もっと私的な形で満せうとする。

青年団の会合は四角ばっていてつまらないが、帰りの夜道を話し合いながら歩くのが楽しみで集まってくるというものがふえて行った。帰りの夜道でのパーソナルな関係が主だということになれば早くから会議の席に坐っている必要もない。それが青年の集会の時間が遅れる一つの理由ともなっていた。

帰りの夜道だけでなく、インフォーマルな仲間が集まる場所も自然につくられることもあった。青年たちが、個人の家や床屋に集ったり、街灯の下の恰好の石のところに集ったり、ロハ台やアゼ道の少しひろくなっているところがたまり場になったりした。

ことに、自分の家が村のなかでの家柄でないものや次三男は、村の行政を自分とは縁遠いことと感じていたので、ロハ台的な集りの方に足がむいた。下層の青年や次三男が中心となっているインフォーマルな仲間は、村の軌道から外れたものとして白眼視され、ときには危険なものともみられたりした。

この実態をみるときに、上からの権力によって、無形の組織を意図的な学習集団に転化しようとする努力は、十分に成功しなかったとみることができる。形式は整い、規約の上での改変は出来たが、実体が学習的になればなるほど、気持の上での脱落者がふえ、強制をとまなわなければ、継続しないものとなって行ったのである。

戦後、この二つの集団関係について新しい変化が起ってきた。権力の後退によって、学習集団を外から支えてきたワクがはずれてしまったので、再び無形の組織が表面に浮び上がった。青年団の会合で雑談が行われ、村芝居のような行事が公然ととりあげられ

るようになった。青年団という集団はよそ行きの場ではなく、うちとけた場だという感覚が復活した。

しかし、この形で感覚的な安定感が得られても、それだけではもの足りないという気持をもつ青年たちが出てくるのは当然のことであった。

「（青年団は）一月一回ずつ旧の十五夜に満月会と称して、定例総会を開いていた。初めのうちは女子青年もまじり、四、五十人いただろう。だが、この満月会なるものの目的がぼやけていた。しいていえば、相互の親ほくをはかるということになっていったらしい。そのせいか会場はガランとした小学校の講堂に、上敷のやぶけたのを敷き、みんな申し合わせたように側の腰板にもたれかかって、雑談にふけていた。

会がはじまり、ちょっと討議事項があった後、すぐ余興に移る。二、三人前に出て歌う。すぐうしろのほうはあいかわらず、ギャギャ雑談ばかりだ。『もう出る人はありませんか、それでは遅くなりましたからこれで』といって帰るのだ。

帰りながら考えてみると、頭のなかに残ったのは、みんなが話していたワイ談の一部と、知らなかった流行歌の一節くらいのものだ。」(2)

このような考えをもつ青年たちは、無形の組織を学習の組織に改造するために、青年運動を展開しようとする。昭和二十三年に山形や宮崎で始められた青年学級の試みが、次第に全国に波及して行ったのは、このような青年の自主的な努力が支えとなっていた。ちょうど明治二十年代の青年運動と同じような事態が現れた

のである。

ここで考えなければならぬことは、無形の青年集団がどのような方法によって、青年自身にとっても、社会にとっても意義のある目的な学習集団になるかということである。

「単に生活年齢の立場から、十五、六才から二十五才頃までの年齢層にあるという年齢階級の面からの集団形成を認めてよいかどうか。そういう意味の年齢階級的な集団ならば、原始社会や未開社会にも存在するものであって、同じような形態がそのまま二十世紀の現代社会に特別に存在する理由にはならない。また、青年期には青年たちは自然的欲求にもとづいて集団を形成しやすい、という観点から自然発生的な面を強調する場があるが、この点から地域青年団の存在理由を認めてよいかどうか。……青年団が社会教育的関係団体としての機能をはたそうとするならば……教育問題解決するために、合理的な組織と方法をとらなければならぬ。」(3)

このような主張は、青年集団の意図的学習集団への改造を示唆している点では正しいとしても、改造の方法の問題を無視している点で問題をもっている。「地域青年団の存在理由を認めてよいかどうか」という点で、青年団は現実存在している。無形の組織の意味が二十世紀に全く存在しないということも疑問がある。

「無形の組織」の筆者は、右の所説と全く反対に、二十世紀における無形の組織の意義を重視している。

「第一に無形の組織が、以上みたような機能をいとなみ、しか

もこれらの機能は、形式的組織や家族、その他いずれの組織によっても代行されぬ以上、社会の近代化、合理化にもかかわらず、ゲマインシャフト的な無形の組織が、存続することは、伝統的な社会学の予期に反して、おそらく必然でさえあるといえよう。そして第二に、さきへのべたように、形式的組織が公的に定めた規約も、無形の組織でもられる規範のなかに内面化されぬかぎり、個人の行動に決定的な影響をあたえることが出来ぬものであるならば、これはまた伝統的な社会学の予期に反して、形式的組織の近代化をはかるだけでは、決して真の近代化を達成出来ぬことは明らかである。」(4)

このような観点を加えるならば、現在問題になっている青年集団の学習集団化は、無形の組織の長所を生かしながら、科学的な内容を通き入れることを考えることにならなければならない。この方法が見出されるならば、明治の三十年代以後に現われたような、学習に対するよそ行きの感じや、階層的な分裂が避けられるであろうし、また、それを避けることができないようでは、民主的な学習集団にはならないということにもなる。

昭和二十八年の青年学級振興法の法制化をめぐって、賛否両論がたたかわされたのは、まさにこの方法の点であった。

青年学級振興法の支持者も、反対者も、青年集団が学習を行うということの必要は十分にみとめていた。しかし、振興法の支持者が、権威とか権力とかの背景によって改造を行う方法をどうとするとするのに対し、反対者は、権威や権力の導入は、学習を改まったふんい気の中におくこととなり、インフォーマルな集団として

の長所を失わせることになる」と主張した。

実際、青年学級が上からつくられるようになる」と学校の補習教育のような形態が多くなり、青年たちのインフォーマルな集団の機能さえも妨げられるようになった。

インフォーマルな集団の長所を生かしながら、学習活動を行うべきだと考える人々は、青年団を母胎として、その方法を理論化して行った。この場合、共同学習という名称がとりあげられることになった。昭和二十九年に日青協から出版された「共同学習の手引」は、共同学習の内容をほぼ次のように特徴づけている。

- (1) 青年自身が推進力となる点で自主性を貫くものである。
- (2) でき上った結論を学ぶのではなく、集団思考によって新たな結論を生み出すものである。
- (3) 相互の学習が行われやすいように二十人以下の小団で行うものである。
- (4) 仲間意識につつまれ、おたがいの意見や態度を尊重しながら行われるものである。
- (5) 討議されたことが実践にうつされ、実践されたことがまた研究されて、さらに新たな実践にうつされるというように、実践と深い連関をもつものである。

これらの性格は、町村青年団のなかで何とかしようと考えていた青年たちが集まって研究をしていたグループの本質をとらえたものであったため、これまで自覚してはいなかったものも、これが「共同学習」なのだという自覚をもつことになり、共同学習という名称は、きわめて短時日のあいだに、全国の青年団に普及し

て行った。

この場合、アメリカの指導者たちが熱心に主張していたグループ・ワークの理論が、共同学習をとり入れる下地をつくっていたことも有利な条件であった。

しかし、無形の組織のなかに、学習活動を取り入れようとする試みは、そう簡単に成功するはずはなかった。学習活動を取り入れようとする、無形の組織の伝統のそれに反撥する。そうめんのようなことはよそうという気分が厚い壁のようにとりまいている。学習を導入しようすると、無言の抵抗がある。この抵抗を排除して、強行すると、みんな発言をしなくなってしまふ。面白くないから青年団の会合に行かないというものも出てくる。そうになると、形式上は青年団が自主的に行っているようになっていても、実際は幹部だけの学習活動になってしまふ。

パーソナルな関係を生かしながら、学習をすすめるためには、やはり雑談のような身近な話題から出発しなければならぬ。雑談は青年団の公式の席でするものでないという通念を打ちやぶって、雑談のなかから学習の糸口を発見することが、共同学習への第一歩だということがはっきりしてきた。

自分たちのくらしの話、結婚の話、親との意見の相違の話、放送劇をきいた話、映画をみた話、そういった身近の話ならば、ひとごとと感ぜない。みんな自分の経験から話し合う材料をもっている。立場も青年によってまちまちである。その話し合いのなかから、いままでの見方が深められ、一致した結論が得られたり、一致しなくとも、みんなそれぞれの立場で成長したりする。こ

ういった態度は、なまぬるいように思われるので、しばしば、旧い形の習学にもどろうとする傾向が現われる。だが、ここから出発しなければ、青年の要求する無形の組織を、その内部から内容的なものにして行くことは不可能となる。

しかし、ただ雑談しているならば、それは学習ではないのではないかという疑問が起ってくる。共同学習という名称であれこれと話しをしていて、青年集団へ行くことが面白いというだけでは、ロハ台がそのまま共同学習だということになって、進歩の要因はみとめられない。

それを学習にまで成長させるためには、雑談のなかにあるものを、知的に正確にとらえて行かなければならぬ。

「どうもこのごろ忙しいのにくらしはよくならない」とか「あの映画はよかった」というだけでは、そこで行きどまりであって、問題が浮び上ってこない。忙しいとすればどのように忙しいか忙しさのなかに無駄はないか、なぜ忙しいのにくらしがよくならないかを、具体的な経験のなかでもっとはつきりつかまえなくてはならない。映画に対しても、ただよかったとか、わるかったというのでなく、どこがよかったのか。どうしてよいと思ったのか。他の人がなぜちがうところをよいと思ったのか。そういう点まで立ち入らなければ学習にはならない。

これらの点を明確にしなければ、学習の段階まで成長しないのである。

こういったほり下げは、話し合うなかでも出来ないことはないが、余り話すことになれていない農村の青年たちにとって、自分

の気持や周囲の環境をたくみに話すことは困難であって、集団の中で話しをすることに抵抗を感じるため、できるだけ短く話そうとする傾向がある。

この障害を打開するために、生活記録運動を青年集団にとり入れようとする試みが次第に強まってきている。生活記録といっても、長いものをひとりで書くという方式よりも、集まったときに話すかわりに簡単な文を綴り、それを皆で討議するという方法が重視されている。

長野県の「青年団運動の記録」には、実際の運営が次のように書かれている。

「いままでは青年団の講習会、研修会というと、数人の講師の講演を中心とした詰め込み主義のもので、集った青年がゆつくりと話し合う機会がなかった。……このことはまた、青年団運動が、青年の生活の問題を素通りにし、青年団の実情を飛びこして、観念の空転に終りがちであったことと無関係ではないであろう。

われわれは、これらの反省の上になんて、青年自身が自らの生活と青年団の実体を注視し、お互に裸になつて『話し合う』雰囲気を作り出し、相互の信頼感を強めていくことに研修会の目標をおくことにした。

『生活綴方』もこの観点から考えられたもので、『話し合い』ではまだ言えない問題を書くことにより、更に素直に自己を裸にするためなのである。綴方の題目としては「私の嬉しかったこと」「悲しかったこと」「私の父・母・兄・妹」「私の

家の暮し」……の中から自由に選択し、年令と性別だけ書くことにした。」(5)

このように書くことを通して、考え方を精密にし、さらにそれが日常生活の中での記録にまで成長すれば、漠然としたよいわるいの印象だけでなく、ことごらの原因と結果がはっきりし、科学的な思考へ一歩近づくであろうと期待されている。またみんなが書くことによって、機関誌がつくられれば、その機関誌を交換することによって、顔見知りのグループの範囲をこえて、より広い集団の仲間意識をつくりあげる作用も発揮できるので、無形の組織の拡大という点でも重要な役割を果たすことになる。

このようにして、共同学習は生活記録運動をとり入れながら、次第に無形の集団に学習集団としての機能をとり入れてきているが、もう一つ大きな障害として考えられているのは指導者の問題である。

雑談から学習への導入のために、書くこと、こまかく具体的に話すことは有効であるが、それが問題の解決への道を歩むためには、生活の見方や考え方が大切になってくる。実際の問題を解決するのに役立つ考え方なのか、問題をはぐらかす考え方なのかを、具体的に指摘することをしないと、いつまでも空廻りをしてしまふ恐れがある。浦和の土合村の共同学習の機関誌「ロハ台」には、みんなの書いた生活記録について、話し合いが行われているが、そのなかで太田堯氏がみんなと一緒に感じ方、見方について意見を述べているが、それが青年たちのもっているエネルギーをひき出すのに大きな役割を果たしている。

こういふ指導者がいれば、共同学習は無形の組織としての長所をもったまま、学習を展開して行くことができる。しかし、一般の青年の集団にこういふ指導者は見出せないのではあるまいか。そうなると、問題を解決するための、はっきりしたすじ道は、いつまでも浮び出ないのではあるまいかという考え方も出てくる。

この点について、現在の日本の社会では、義務教育で教えられているあたり前のことが、現実の生活の中では行われていないのだから、すぐれた学識のあるものでなくとも、みんながいっしょに考えれば、問題の正しい捉え方は自然に出てくるのであって、ただ当然のことを旧来の慣行にとらわれないで考えられる態度をつよめるために、青年集団の内部の指導者の共同研修の機会をつくることと、地域に住む成人のなかでいっしょに討議に参加してくれて、しかも自分の意見をおしつけたい人を見出すことに努力すれば、共同学習はうまく展開するはずだという見解もある。

このように、共同学習の試みは、幾多の困難をもちながらも、学習の新しい試みとして急速に進展している。現状からいえば、全国の青年団のすべてが共同学習を強力に展開しているとはいえないであらう。しかし、共同学習という用語がつかわれるようになって、まだ一、二年しかたないのに、この方式は、青年団活動の中核となりはじめている。

青年団ばかりでなく、青年学級も、婦人会も、公民館の集りも、次第に共同学習の方法をとり入れるようになってきている。無形の組織を排除して、学習組織をつくらうというのでなく、無形の組織と学習活動を結びつけることによって両者の長所を併せもと

うとする社会教育における新しい試みが、成功するかどうかは、農村社会の将来にも大きな差異をもたらすであらう。

無形の組織が学習活動と結びつくことによって、過去の封建的な関係や、部落根性を打破することが出来るならば、それは日本の民主化にとっても大きな事件であるにちがいない。「権威主義、身分主義、閉鎖主義を原則とした、古い組織にとってかわる、平等で、自由な、そしてまた解放的な同志の結合、友人の仲間」(6)が新しい無形の組織として誕生するならば、社会教育の学習活動もさらに大きな進展をみせることが期待されるからである。

〔註〕

△お茶の水大学▽

(1) 永井道雄「無形の組織」 思想一九五四年十二月

(2) 長戸光雄「牛と耕耘機と」——読売新聞社「若い河」昭和三〇年九月

(3) 平沢薫・豊沢登編「青年社会学」昭和二八年 二二五—

七頁

(4) 永井道雄、前出

(5) 長野県連合青年団「青年運動の記録」昭和三〇年 一六

頁

(6) 永井道雄、前出

参考文献

日本青年団協議会青年団研究所「共同学習の手引」昭和二八年

読売新聞社「日本の青年」昭和三〇年

「社会教育」特集グループ活動 昭和三〇年六月号

金子書房 青年心理講座V「青年集団」昭和三〇年